様式６（左）

普及活動の成果

課題名　：ハウスびわ担い手の育成　　振興局名：五島振興局
活動対象：ＪＡごとうハウスびわ部会　　実施期間：平成２６年４月～平成３０年３月

【対象の概要】

ＪＡごとうハウスびわ部会は平成４年に結成され、現在は１．９１ha、１２戸が栽培している。品種は「長崎早生」と「福原早生」で出荷時期は2月下旬から5月中旬までである。平成29年の出荷量は１３．３ｔ、平均単価は2,279円/ｋｇで、県平均（1,999円/kg）より高い。

【課題設定の背景】

五島地域の露地ビワは島内自給程度に栽培されていたが、寒害による減収や台風等による樹勢低下などから産地化はなかった。平成元年に１戸の農家が軽量、高単価であることからハウスびわの栽培を始めた。その後平成４年に5戸、平成８年、平成２１年と補助事業等を活用し、産地の規模拡大が進んだ。

生産者の高齢化が進む中で平成 26 年、27 年に五島市農林公社を卒業した２名が後継者として就農し、栽培に取り組んでいる。また平成 20 年から福原早生の栽培に３戸が取り組んでいるが、樹勢が強く、着房率が低く、障害果の発生などもあり、生産量が低い。

【活動目標】

新規就農後継者への栽培技術定着支援と福原早生の生産量増加

【関係機関との連携（活動体制・役割分担）】

農業振興協議会果樹・茶部会（五島市、ごとう農協、県南農業共済組合五島支所、五島振興局）で指導者の研修会や情報交換を行っている。部会への指導支援は JA 事務局及び振興局が定期的に検討会や研修会等を開催し、技術指導を行っている。

【活動経過】

①新規就農後継者の技術定着
〇振興局、JA 担当者で月１～２回程度個別に巡回を行い、基本的な栽培技術を指導した。
〇全部会員で全圃場を巡回し（２ヶ月に１回）、技術の高位平準化をはかった。
②「福原早生」の生産量増加
〇樹勢の安定のため、整枝方法や新梢の誘引、芽かき等の枝葉管理を徹底し、花芽分化を促進させた。
〇障害果（紫斑病）対策として二重カーテンの資材寒冷紗の被覆時期や果実袋の検討などをおこなった。
〇先進地である大村市から福原早生の高収量生産者を講師として呼び、管理技術の講習を行った。また、２年に１回、県内外の先進地への視察研修等に取り組んだ。

様式6（右）

【普及活動の成果】

①　　新規就農後継者の技術定着

平成26年10月に就農したN氏は一時単収が低下したものの、現在は回復している。また、2段杯状型から1段盃型へ低樹高化が完了し、作業の軽労化が可能になった。

平成27年4月に就農したS氏は樹冠の拡大に伴い、1次間伐、2次間伐を行い独立樹で受光体勢が改善された。間伐に伴い収量は低下したが、今後は樹容積の拡大に伴い増加する見込みである。

②　「福原早生」の生産量増加

平成26年に1次間伐、28年に2次間伐を実施し、今後は樹容積の拡大に伴い、収量は増加すると思われる。また整枝せん定の改善や枝葉管理の徹底により樹勢も安定し、着房率も年々向上している。障害果対策として二重カーテンに紫外線透過量が少ない資材の使用や、降温対策として着色期に寒冷紗を被覆するようになり、障害果（紫斑症）の発生は少なくなった。

写真　間伐後のハウス

表　福原早生の販売量、単収の推移

収穫年	H26	H27	H28	H29
販売量(kg)	1,149	1,215	1,465	1,993
単収(kg/10a)	410	434	543	738
着房率(%)	69.6	77.1	78.1	88.3

【対象の声】

基本的な技術や簡単なことがまったくわからなかったが、こまめに巡回してもらい、農薬等の効果的な使い方が理解できた。

定期的に部会全員が全員のハウスを見て研修することで会員のやる気が向上し、品質向上につながっている。

【今後の課題】

約1／3の部会員が高齢化し、後継者がおらず、産地としての規模の維持には後継者確保対策が必要。

大玉果生産のため、摘房が強く、着果量が少ないため、単収が低い。極端な大玉果生産より、単収の増加に取り組む必要がある。

【成果の活用及び普及活動上の留意点】

新規就農後継者はまだ経験が少なく病害虫や基幹作業の理解度が低いこともあり、技術支援は今後も継続する。福原早生は極端な大玉生産への意向が強いので、単収増加のため、袋掛け数の検討や障害果対策について取り組む必要がある。

【発表･参考資料】

無し